

先生おじやまします

り国家と宗教の癒着に対する

大多数の国民が「無宗教」を標榜してはばからない国、日本。その一方で、自然との共生のシンボルとして、「八百万の神」といった多神教文化が称揚されるなどの「揺り戻し」も見られます。こうした現象と私達はどのように向き合えばよいのでしょうか？

そこで今回は、小原克博先生（神学部神学科教授・一神教学際研究センター長）の研究室にお邪魔し、宗教と人間の関わりについてお話を伺いました。

神学部神学科教授
一神教学際研究センター長

小原克博先生

日本は、社会と宗教の切り離しに専心してきました。また、オウム真理教による事件（1994、1995年）も、宗教に対するネガティブなイメージを作ったと言えます。

しかし、人間は宗教との関わりなしでは生きることができません。たとえ毎週教会に通うなどの習慣がなかったとしても、「宗教的なもの」は私達の日常に溢れています。

「食わず嫌い」、イメージ先行の傾向が見られると懸念されています。例えば「一神教」排他的」という言説。9・11テロ（2001年）や

言える存在ですが、そこに描かれている輪廻転生や人の生死の問題は宗教が向き合ってきたテーマです。初詣やクリスマスにしても同じこと。本来の意味を失ってはいても、宗教的な営みであることに変わりはないのです。

こうした「宗教との『ゆるい』関係」を先生は決して否定されません。しかし、最近の一神教に対する批判には、

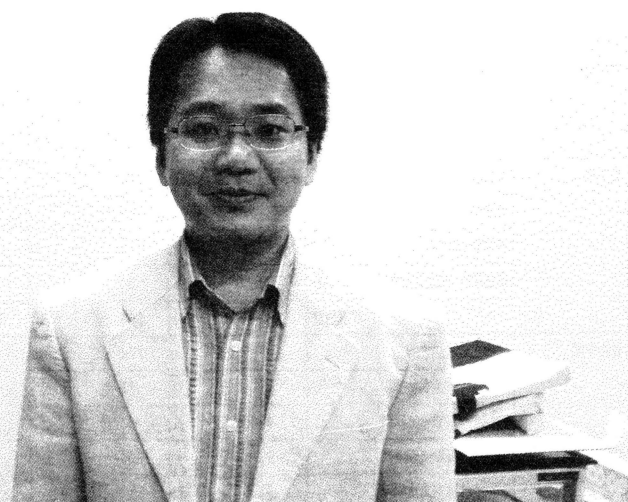
「食わず嫌い」、イメージ先行の傾向が見られると懸念されています。例えば「一神教」排他的」という言説。9・11テロ（2001年）や

自立した国際人となるために

反省」を挙げられます。これによって多大な犠牲を払った

そのよい例が漫画やアニメ。サブカルチャーの代表格とも

その後のコーラン焼却事件の中で言われたことですが、前



者は政治的トラブルに宗教が絡んだものであり、後者は

「相手が大切にしているものを侮辱してはいけないというマナー」を破ったがゆえに起こったものと言えるでしょう。

「急速に進む国際化の中で生きていくためには、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教といった一神教について学ぶ必要があります。『一神教』破壊・戦争、多神教『平和』という決めつけでは、世界を正しく理解することはできません。その上で、特に同志社の学生にはキリスト教が重んじてきた『個』の重要性について学んでほしいとおっしゃいます。『新島先生がキリスト教主義を教育理念に据えたのは、『一人で立つ強さ』を育てるためです。人間だけでなく、神と向かい合う中で

生まれる『良心』と『責任感』こそ、変革の時代を生きる『自治自立の人民』に必要なと考えていたからです。一神教に対する正しい理解を培うために、最近では『専門であるキリスト教に加え、イスラム教やユダヤ教、また日本の伝統宗教についても研究されているという先生。『多神教と一神教の関係性について問うていきたい。』『対立』と決めつけず、『共存』の可能性を模索しています。新島先生が生きた時代同様、現代の日本は大きな岐路に立たされています。しかし、決して

ぶれない穏やかな姿勢に、本学の原点・「良心教育」を垣間見ることができました。

（広報委員 矢部景子）